

現代若者文化と「場所」(4) 渋谷センター街のギャル・ギャル男ライブの変遷

—Gathering から Sharing へ—

一橋大学大学院 荒井悠介

1 目的

本報告の目的は、都市における逸脱性の高いユース・サブカルチャーズ(以下 YS と略記)のライブに属する者の行動原理の変容をソーシャル・ネットワーキング・サービス(以下 SNS と略記)との関りのなかで明らかにすることである。

2 方法

本研究の対象は、ギャル・ギャル男と呼称される YS を中心に組織された「イベサー」(イベントサークル)およびそのメンバーである。「イベサー」とは、ストリートにたむろし、クラブイベントを行うライブのことである。報告者は、渋谷センター街のストリートを拠点とするライブおよびその界に対し、2001 年より 3 年間当事者として関わった後、14 年間、参与観察とインタビューを中心とするフィールドワークを実施した。本報告では主に 2000 年代から 2010 年代にかけての彼らのライブにおける行動原理の変化に焦点を当てる。

3 結果

2000 年代においても渋谷センター街では、約 3000 人を超えるギャル・ギャル男 YS のライブのメンバーたちがそれぞれの縄張りにたむろするという状況がみられたこと。ギャル系の若者から支持を集めたファッションビル「SHIBUYA109」が 2008 年度まで増収を続けたこと。「渋谷で一番になれば日本で一番、アジアで一番になれる」というような当時の対象者たちの発言。このようなことから 2000 年代の渋谷は、その内部の中心となる場所は変えつつも、少なくともギャル・ギャル男 YS にとっては、依然として文化的に象徴的価値を備えた「舞台」であったとみることができる。

ライブのメンバーたちは、このストリートで実践される社交や相互行為を通じて、楽しみつつ、ギャル・ギャル男 YS 内での威信の獲得を目指して活動を行っていた。また彼らの活動には、脱社会性と異性愛の利用、逮捕されない範囲の違法性のある行動といった悪徳性が含まれていた。そして、そのような悪徳性を含む活動を通じてキャリアを積むことが、将来の社会的成功に結びつく、文化資本・経済資本・社会関係資本・象徴資本といった資本を得ることにつながると捉えられていた。

だが 2010 年代に入ると、ライブのメンバー数は急激に減少し、2018 年現在では、100 名にも満たなくなっている。この要因として考えられるのが、YS およびライブのメンバーらにとって SNS の存在が拡大したことである。このことは、現役のメンバーたちの活動や威信、そしてそこから得られる資本の質を変化させた。メンバーたちは、従来の悪徳性の高い活動は将来へと永続するリスクにつながると捉えるようになり、そのような活動を控えるようになったのである。さらに、YS 内における威信がセンター街やイベントの集客数ではかられるのではなく、SNS 上でポジティブなリアリティをシェアすることが威信や資本の獲得に結びつくと考えている。すなわち、もはやライブに参加し活動することは、威信と将来に繋がる資本の獲得には必ずしも結びつかなくなったのである。

4 結論

以上に述べたように、2000 年代の都市における逸脱性の高いギャル・ギャル男 YS のライブの行動原理は、同じ時間、同じ場所に集まり悪徳性を含む活動を通じて楽しみや威信と資本を得るという Gathering に基づいていた。だが、2010 年代になるとポジティブなリアリティを SNS 上で共有すること、すなわち Sharing から威信および資本獲得を目指す方向への移行がみられるのである。